

手伝っていたが、みなさんご存じの食糧不足だ。親類もいい顔をしない、なさけない思いであった。

人間どんぞこに落ちた時こそ、その持つ心が、よくあらわれるものだ。その頃、誰からか炭鉱が景気が好いが行ってみないかと云われ、思いきって炭鉱の中心地、福岡県に移住、幸いにも三井山野炭鉱に就職、家族が引揚げてくるまで寮に入り、家族の引揚げを待った。

その内、炭鉱生活にもなれて、もっと早くきていればよかったと反省していた。終戦より二年目に母が姉の子どもをつれて引揚げてきた。姉妹は、引揚げの途中で死亡、姉に代って、幼い子どもを、苦勞して一緒に引揚げるのがいかに大変であったか、母の引揚げ時の話を聴くにつれ、遠い所から大変であつたらうと感謝している。

何より平和

滋賀県 中川 静 恵

昭和二十年三月十九日、夫に召集令状がきて、夫とゆつくり話すこともできないまま出発の時間がきてしまったような記憶が残っています。

その後、つぎつぎと健康な男子は応召されてゆき、八月九日ソ連参戦、大和区の中心街の住民は疎開することになり大石橋の同系会社、社宅に割当られたおりに到着しました。玄関で八月十五日の終戦の詔勅が放送されている時でした。それで、予定が変わり、会社の倉庫に奉天に帰宅出来る日まで共同生活です。雨季でもないのに、毎日強く降り続けました。「礎となった霊の涙だ」とも言いあいました。ようやく二か月過ぎに帰宅しました。

女、子供は一步も外出出来ず、窓ガラスを破られないよう板を張り、男子の方々がお世話して下さるので

す。それはソ連兵から身を守るためです。又髪を切り、時計、カメラ、貴金属を用意して身のちぢむ思いでした。

昭和二十一年のお正月過ぎまで続きましたが、いつまでもただ暮しておられない状態です。

春日町、青葉町の両側に食料品、菓屋さん、お砂糖、どこにこんななと思うほど出ています。きび餅、あべかわ餅、不思議なくらいでした。気力に強さができ、主人のことが気にかかりながら、緊張がやわらいできました。会社の人達は一人一人出来る仕事を見つけ、家族を守り、帰国の日まで一丸となつて下さいました。その後女子寮に移りました。危険のないように、とりはかつて下さったのです。収容所の同胞のために、敷ぶとんを作りました。でもそのぐらゐの気づかいも当地の寒さをしのぐことはむずかしかつたこと、お気の毒で、胸のいたみを今もわすれることが出来ません。春らしくなつてきますと、徴用で内地から来られた青年が会社のため三笠やきを作られます。そのあん作りを毎日お手伝い致しました。

奉天地区収容所の人びとの引揚げが終り、一般の引揚げが始まりが十月、杜宅の人びとと一緒に帰国致しましょうと、常務様のお言葉でたいへん嬉しく思いました。でもよく考えますとき、前と背に子供をかかえ手を引いての姿で皆様にご迷惑をおかけしなければならぬ、常務様に相談に参りましたら、徴用の人四人、体の具合の良くない、一日でも早く帰国した方がよい女子職員の人達のグループをこしらえてくれました。

昭和二十一年六月十日、奉天駅に集結致しました。一般引揚げの第一班として奉天駅を出発、生きて帰国しなければの勇氣は三人の母親である力です。

無蓋車でアンペラの下は薪と食料です。その上に乗せられ、錦西収容所に到着、しばらく船待ちです。

商魂たくましい現地の人、水もお金を取ります。コロ島で二晩ほどワラの上で過ごしました。まるで馬小屋です。乗船しましたが、若い男子は残され、荷物は運んでもらいお互いの無事を祈り、祖国に向かいました。信濃丸の船長のご挨拶には「水を積めるだけ多く積み、お魚も集め食べて頂くように準備している」

と言つて病氣の子供にお粥を、本当に有難いお心づくし、感謝のほかありません。

内地の山が薄く見えてきました。船の中は喜びでたいへんです。祖国の岸です。長男の手を握り、嬉しきで涙を流しっぱなしでした。

七月二日、博多港に上陸、あの感激は今も昨日のように思われます。婦人会の方々から海草の入った大きなおにぎりを一個ずつ頂きました。船路を共にした皆様とそれぞれ県別に分かれ、割当てられたお寺に一泊、七月四日夕方、主人の実家にたどり着きました。

当時の姿は前に一人、背中一人、長男は荷物を下げ、袋の中味のたいせつなもの、やかん、洗面器、薬、次の日からたいへんです。両親と妹の三人暮しの中に、親子四人加わって七人家族、食べ物になりますと、水増しという言葉どおり薄くのばすわけです。

私も百姓仕事に息たえだえですが、夫の生きて帰る日を待ち続けていることが生き甲斐の日々、前進の日々と、けんめいにかんばりました。

夫は、昭和二十年八月十四日戦死、昭和三十年十月

二十五日に公報の伝達を受けました。県庁より遺骨を受け、多賀駅に降りますと、主人の父が白い箱にすがり、悲しみの涙を見せた時、親であるかぎり、かけがえのない息子を待ち続けていらしたことを目の前で知り、私は倒れそうになってよろめいたことを今もおぼえております。

私の逃避行

滋賀県 廣田 きみ

二十年八月九日ソ連参戦。その夜、当時住んでいた、新京市のがが家へ隣組を通じて、突如疎開命令を受けました。ソ連兵がそこまでできている。女子供はじまになるのですぐに立ち退くよう、ただし男子は最後まで新京を守るべく、動かないようにとの厳命であった。戦争末期でありながら、空襲のおそろしさも知らずあんがいのんきに銃後を守っていた私共の驚き、地に足がつかないまま取り急ぎ、おしめ、水筒、ミルク、毛布